プロローグ：「ゼミ初のバーチャル出版に至る経緯について」

行政学演習担当教員　中村祐司

もともとバーチャル出版企画は、1 昨年度（2012 年度）後期の学部専門教育科目である地方自治論の授業で「地域社会の現在」というタイトルで取り入れたのが最初である。新たな参加型授業を模索する中で、受講生同士で徹底的に話し合う“編集会議”の場を経験させると同時に、書くことの大変さと達成感を味わってほしいという思いがあった。また、せっかくエネルギーを注いで書き上げた作品をネット（電子媒体）上に痕跡として残しておきたいという思いもあった。

やや苦し紛れに試行したものの、これが受講生には予想外に好評だったようだ。受講生にとって教員からの一方的な説明を咀嚼するだけでは、どうしても消火型で終わってしまう。たとえばレジメを皆の前で発表したとしても、それに対する他の受講生からの反応が得られなければ、満足度は中途半端なままであろう。

受講生にとって、1 グループを構成する５、６人が円形に椅子を並べ直接向き合う形で、自分が書こうとする中身の構想や荒原稿を紹介し合い、章の名称や掲載順、共通の視点について、活発にやり取りをする経験は新鮮だったはずだ。

教員にとっても教育手法をめぐる新たな発見であり、これに味を占めて翌年度（2013 年度）後期には、地方自治論（タイトルは「地域資源をどう生かすか―私たちの提案―」）だけでなく、基盤教育科目の現代政治の理論と実際（「政策をめぐる技術と社会」）でもこのやり方を踏襲した。

そして、今回、演習としては初めて統一テーマ「都市空間の新たな可能性を探る―若者からのまなざし―」を掲げ、3 グループに分け各章の責任を持たせる形で 3 章構成のバーチャル出版を企画した。教員からすればかなり思い切った路線変更である。前期のゼミといえば、これまでは個人が自分でテーマを見つけ、個人として論文を仕上げ提出するスタイルを長年継続してきたからである。また、グループ単位での取り組みはあくまでもジョイントやまちづくり提案に向けた後期のゼミ活動で行ってきたからである。

最初の 1 カ月半ぐらいは毎回 16 名全員で話し合いながら進めていこうとしたが、どうもゼミ生一人ひとりの顔がなかなか見えてこない。人数の面でやはり物理的な無理があったようだ。そこで、執筆スケジュールの厳守や現場との関連性を持たせるなど全体の約束事を定めた上で、5 月後半から 3 つのグループを作って、各グループの裁量にできるだけ任せるようにした。

今年度の前期ゼミには、他の特徴もある。物怖じしないというのか、素直かつ率直に考えを出し合う。しかも明るい雰囲気の中でそれが行われ、とても気持ちの良いゼミになっている。そして、後期のゼミ履修者が自ら研究室のメイン事業であるジョイントやまちづくりに向けて、一歩踏み込んだ行動を取った。

各章のタイトル、掲載順、章ごとの序文と結論、エピローグ、研究室 HP 掲載など、”出版”に至るには、まだいくつかのハードルが存在する。しかし、他者や他グループの成果の読み込みも含め、しっかりやってくれるに違いない。そう確信している。

2014 年 7 月